

解説

本書は Pascal Bruckner, *La Sagesse de l'Argent* (Éditions Grasset & Fasquelle, 2016) の全訳だ。ただし翻訳にあたっては、Steven Rendall による英訳 *The Wisdom of Money* (Harvard University Press, 2017) を使い、英語からの重訳となっている。重訳だということを過度に重視する人もいるし、哲学書ならその度合いはさらに高まるけれど、本書は比較的平易に書かれたエッセイ集だ。微妙なレトリックに頼った主張や微細な用語定義の差に依存した議論はないので、重訳によるデメリットは限定的だとは思う。が、これは読者諸賢のスタンスにもよるかもしれない。

さて本書は、題名の通りお金についてのエッセイ集だ。多くの哲学者や知識人は、お金を何やら卑しく汚らしいものであるかのように扱う。これは古今東西かわらない。古代中国のある知識人は、お金という言葉の口にするにすら忌まわしいと考え「阿堵物」なる表現を編み出した。そうした人々は、お金は真に重要なものではない、清貧がよいのだ云々と述べる。

でも実際にその知識人たちの様子を見ると、それが本心なのか、単なるやっかみの酸っぱいブドウなのかは、しばしばはっきりしない。しかもそうした知識人たちの多くは、別に餓死寸前なわけでもなく、むしろかなり豊かな生活を送り、相対的には肥え太った安泰な立場から、高邁な清貧の勧めを説いたりしている。

お金は確かに人を変える。宝くじの当選が人生の破滅をもたらした人の話はいろいろ耳にするし、お金持ち同士の正気とは思えない見得の張り合い、守銭奴ぶりと異様な浪費との奇妙な共存などは、ゴシップニュースで面白おかしく伝えられるものを見ても異常だし、明らかに使い切れないほどのお金を持ちつつそれに固執する人々の気持ちは、下々のぼくたちには理解し難いものではある。そしてそこから、お金持ちは卑しくお金のことしか考えていないと結論し、その裏返しとして、貧乏人は心が清らかでお互いに助け合い、気高くさえるのだ、というような主張もしばしば聞かれる。

でも実際に貧乏な人々と付き合ってみると、あたりまえのことだけれど、別に貧乏だから心が清らかとか気高いなんてことはないのはすぐわかる。貧乏な故の余裕のなさが、狡猾さや詐欺、窃盗など様々な悪徳を生み出すし、助け合いも単に、そうしなければ生きていけないから仕方なくやっているだけという場合が多いこともわかる。そしてもちろん、世界全体を見ると、19世紀から急激に社会（つまりそこに暮らす人々）が豊かになるにつれて、生活は改善し、自由や平等が促進され、環境もよくなってきているのはまちがいない。むしろそれだけの余裕があればこそ、「貧乏がいい」などと口走るだけのゆとりもできたわけだ。

削除: お金が人を腐敗させ、あらゆる邪悪を生むというのはピンクフロイドの古典「マネー」にも謳われている。...

本書はそうした、安易なお金や富への批判が持つ偽善を指摘する。

お金のよさは認めなくてはならない。お金をそんなに蔑視してはいけない。お金を稼ぐことについて後ろめたく思う必要もない。そして逆に貧乏をありがたがる必要もない。一方で、お金を盲信し、それがすべてだと思っ

書式変更: インデント: 最初の行: 1 字

著者パスカル・ブリュックネールは、哲学者兼作家だ。

ポストモダン哲学華やかなりし頃、デリダとかドゥルーズとかに続く若手哲学者として、ベルナール・アンリ＝レヴィなどと並んでヌーヴォー・フィロゾーフなどもてはやされたこともある。このヌーヴォー・フィロゾーフという人々に何か統一

本書の著者パスカル・ブリュックネールはその指向が特に強い。かれはこれまで、様々な形で現代の言説や思想にこめられた、左翼的な傾向やそれに伴う偽善を批判してきた。

たとえば邦訳のある『無垢の誘惑』(1995、邦訳法政大学出版局、1999)では、多くの場面で人々が、自分は無垢だと主張し、被害者ヅラをしたがる傾向を批判している。自分の責任から逃げることで不毛な議論やそれに動かされた政策が生じる、という批判だ。

削除: に対する

削除: を展開

削除: で何もしていないのにひどいめにあった

削除: そうしたものの多くは、実は自業自得の場合も多い。でもそれを認めず、自己

1983年の『白人の涙』では、西側の特に左翼系知識人が、かつての植民地支配に対する後ろめたさもあり、無用に反西洋、親発展途上国的な議論をしたがる点を指摘する。そしてそれにより、途上国への援助などが歪められているという。

さらにその発展で2006年『罪悪感の圧制: 西洋マゾヒズムに関するエッセイ』では、西側知識人が途上国に対する罪悪感のせいで反西洋とアフリカやムスリム世界に対する甘い態度をとり、それがまさに移民の洪水を通じて西洋文明の基盤そのものを破壊しかねないと警告している。そして近年のエッセイでも安易な多文化主義が、啓蒙主義的な価値観の破壊を生むと述べる。もちろんこれは多くの反発を呼び、論争を引き起こした。本書も、そうした左翼的な思想が持つ偽善に対する批判という流れでは一貫している。

削除: 警告し、啓蒙主義の復活を訴えている

削除: 、批判された

削除: 知識人からの

削除: 西洋の特に

また、小説家としても知られ、ロマン・ボランスキーにより映画化された『赤い航路』(1981)は邦訳もある(扶桑社、1993)。

訳者の私見だが、本書の意義はそのバランス感覚にあるのではないかと、多くの論者はやたら

削除: 本書の主張をどう思うかは皆さん次第だ。訳者は、比較的バランスが取れていると思う。

に先鋭的な立場をとることで、かえって主張を現実離れした無意味なものにしてしまう。無限遠の彼方でお金が使われなければ現在のお金もなりたないような議論だの、人がすべての取引で機械的に0.0001円の差まで考慮するようなモデルだのも、そうしたお金の極端なとらえ方の例だ。そうすると、だれでもやる日用品の買い物が、やれ決死の跳躍だ暗黒へのナントカだとおっかない出来事されてしまい、それがちょっとつまずけばいきなりハイパーインフレで世界の破滅。そんな極論に走らず、人々がお金を使って普通に行う、当然のような取引の感覚を重視すべきだ。本書のバランス感覚はそう物語ってくれる。

それをどう思うかは皆さん次第。でもどの立場であれ、楽しく読めるエッセイ集になっているのはまちがいないし、新しい発見もあるはずだ。読者のみなさんの中から、この思索をさらに発展させる人々が出てきてくれることを願いたい。

本書の翻訳は、前半を森本、後半を山形が行ったうえで、山形が全体に手を入れている。まちがいなどお気づきの点があれば、訳者までご一報いただければ幸いだ。明らかになったものについては、サポートページ <https://cruel.org/books/widsomofmoney/> で随時公開する。

2018年2月 東京にて

訳者代表 山形浩生 hiyori13@alum.mit.edu

削除: すでにお金について常識的な見方ができている人からすれば、むしろあたりまえすぎて目新しさがないとすら感じられるかもしれない。でも本書を拝金主義の唾棄すべき主張と思う人もいるだろう。でも、